

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第25号

平成28年4月12日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

室町新体制の創造者とも言われる高師直

足利家執事から幕府執事へ 執事施行状の発給で地位確立

建武の新政では政権の中枢に

今月のテーマは、正行と高師直です。

正行から見れば、高師直は四條畷の合戦における足利軍の総大将であり、足利直義と対立しながらも、足利幕府を支える新興武士団の棟梁、実質軍事のトップと映ります。

しかし、高師直の人生を繙いていきますと、室町新体制の創始者ともいわれる政治能力の持ち主としての存在も見えてくるのです。

この政治能力は、代々足利家の執事職を勤める家筋であったことに加え、建武の新政においても、政権の中枢に入り、結城親光等と政務をとるとともに、楠木

で「執事施行状」を始めます。この執事施行状こそは、足利尊氏が全国の守護大名らに恩賞を与える手続きを自らの手に集中する手段でした。

高師直は、足利尊氏が恩賞を与えると、執事施行状を発して、守護から守護代、守護代から下級武士団に伝え、施行します。そして、その受け取りである請文が逆に下から上に帰ってくる仕組みを作ったのです。

いわば、將軍の発する恩賞は、すべて執事たる高師直によって管理される仕組みです。この執事施行状によって、幕府中枢の地位を固め、室町新秩序の創始者として君臨することができたと、亀田敏和氏はその著「高師直」で述べておられます。また、同氏は、この執事施行状が約200通も現存すると述べておられます。



↑「太平記絵巻」第8巻 將軍足利尊氏邸を包圍する高師直の軍

正成ともクーデター鎮圧に向かうなど、足利尊氏や直義と違った新政権との関わりから生まれてきたことが読み取れます。

室町幕府は、延元元年11月、建武式目制定で実質スタートを切りますが、この時、足利家の執事から足利幕府の執事となった高師直は、新しい統治手法とし

尊氏を軍事力で支え続けた師直

そしてまた、足利尊氏の軍事面を支えたのも高師直とその一族でした。

足利尊氏の戦いには必ず名前が登場します。

元弘3年、足利高



↑「太平記絵巻」第8巻 四條畷の合戦で、師直の鎧を若党と奪い合う上山六郎左衛門

氏の鎌倉出陣、建武2年の中先代の乱、延元元年の尊氏の東征、湊川の戦、暦応元年、奈良般若坂そして堺浦石津での北畠顕家との戦い、そして正平3年、四條畷の戦い、観応2年、打出浜の戦い。

北畠顕家との死闘に勝ち抜き、南朝・北朝天下分け目の戦いとなった四條畷の戦いで楠正行を打ち破った高師直は、足利尊氏を軍事力で支え続けた貢献度ナンバーワンの存在であったともいえます。



↑太平記絵巻第8巻 正行、正時兄弟討死の場面

四條畷の戦いで、配下の上山六郎左衛門が師直の身代わりとなって正行の前に立ちはだかる場面が登場しますが、この場面は、太平記絵巻にも描かれています。師直にも優秀な部下がいた証でもあり、正行も偽首とわかったとき、上山の行いを「敵ながら、あつぱれ。」と、褒めたとも伝わっています。

そして、高一族が、如何に勢力を誇っていたかは、その守護分国を見れば明らかともいえます。

伊勢、山城、佐渡、伊賀、武蔵、河内、和泉、尾張、越後、石見、備後、長門、上総、丹後、但馬、三河、因幡、備中と18カ国を数えます。

正行が、父正成の遺訓を守り、相手にした勢力がいかに大きかったか想像できます。

なお、高師直と高師泰、兄弟であることは間違いないようですが、何れが「兄」で、何れが

「弟」かは、定かではないようです。師直「兄」説が有力とのこと。どちらかといえば、師直は政務に強く、師泰は軍事に強かったようです。

直義との対立に負け、最後は惨殺

しかし、軍事力に勝った高師直ですが、足利直義との対立・確執が四條畷の合戦後の在り様を大きく左右しました。

早くも四條畷の合戦のあった翌年、師直は幕府の執事職を解任されます。そして、足利直義による師直暗殺計画が発覚するに及び、その対立は決定的となります。

直義の暗殺計画を察知し、直義邸から逃げ帰った師直は、師泰ともども足利将軍御所を取り囲み、直義の引き渡しを要求します。

尊氏は、師直と交渉し、直義の引退と関係者の流罪によって和睦を図り、師直は執事職に返り咲くのです。しかし、その後足利直冬（冬）の勢力が九州で猛威を振るうと、尊氏が九州に出陣することとなり、師直も従って出陣します。

この混乱の間隙をぬって、出家していた直義は京都を脱出し、南朝に投下します。そして、直義はその勢いをかって師直・師泰の身柄引き渡しを突きつけるのです。

尊氏は、前と後ろに敵をもつこととなり、身の危険を感じ、帰京の途に就きます。

摂津打出の浜の戦いで激突する尊氏・直義兄弟。

尊氏は破れ降参しますが、直義との和睦成立し、結果として義詮への政権移譲を可能としましたが、尊氏を支え続けた師直・師泰兄弟は、この帰参途上惨殺され、果てることとなります。

尊氏か、師直か、義詮か

左の騎馬武者蔵は、尊氏を描いたものではないかと言われてきましたが、師直説・義詮説もあります。

正行の肖像画は残っていません。しかし、残っていても『だれ』かわからない。歴史を繙く楽しさを感じます。

←騎馬武者蔵（京都国立博物館所蔵）尊氏・師直・師詮説が飛び交う



（文責「四條畷楠正行の会」

代表 扇谷昭